

米中激突3

包囲下のパラオ

大石英司

Eiji Oishi

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▢（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▢キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

地 插
図 画
平 安
面 達
惑 裕
星 章
幸

目次

プロローグ	13
第一章 グラム	18
第二章 シミズ・リバー	43
第三章 シーベルS-100	73
第四章 上海商工会	102
第五章 戦略指揮局	132
第六章 工作員	160
第七章 処刑	187
第八章 聖地	211

登場人物紹介

●日本

防衛省

〔陸上自衛隊特殊作戦群隷下 極秘任務部隊〈サイレント・コア〉〕
おとなしせいじ
音無誠次 二佐。〈サイレント・コア〉創設者にして隊長。

土門小隊

ど もんこうへい
土門康平 三佐。小隊長。学者肌のマイホーム・パパだが、頼れる司令塔としての顔も。コードネーム：キムリック。

はたけともゆき
畑 友之 曹長。冬戦教からの復帰組。コードネーム：ファーム。

まちだ はる お
待田晴郎 二曹。地図読みのプロ。コードネーム：ガル。

みずの とも お
水野智雄 二曹。元水泳の強化選手。コードネーム：フィッシュ。

た ぐちしん た
田口芯太 三曹。部隊随一の狙撃手。コードネーム：リザード。

あ づ ま だ い き
吾妻大樹 三曹。山登りが人生という男。コードネーム：アイガー。

ひ が ひろ み
比嘉博実 士長。ドンパチ好きのオキナワン。田口の「相方」を自称。コードネーム：ヤンバル。

司馬小隊

し ば ひかる
司馬光 三佐。部隊の紅一点にして最強の小隊長。コードネーム：ターキッシュパン。

うるしばらたけとみ
漆 原武富 曹長。司馬を補佐する。コードネーム：バレル。

ふくとめだん
福留弾 二曹。小隊のまとめ役。コードネーム：チェスト。

み どうそう ま
御堂走馬 二曹。元マラソン・ランナー。コードネーム：シューズ。

い い かける
井伊翔 三曹。司馬小隊のITエンジニア。コードネーム：リベット。

かわにしまさふみ
川西雅文 三曹。元Jリーガー。コードネーム：キック。

あ び る あきら
阿比留憲 三曹。対馬出身。西方普連から修行にきた。コードネーム：ダック。

あねこうじ さねあつ
姉小路実篤 士長。コードネーム：ボーンズ。

ゆ ら しん じ
由良慎司 士長。西方普連から引き抜かれた狙撃手。コードネーム：ニードル。

外務省

パラオ日本大使館

かたくらひろし
片倉博史 パラオ駐在、特命全権大使。

さくらぎそうじ
桜木荘司 二等書記官。

[笹森財団]

たけうちかなえ
竹内香苗 笹森財団の研究員。

/// 韓国 ///

陸軍

カンチェハ
姜彩夏 大尉。韓国陸軍参謀本部作戦二課に所属。コードネーム：ラグドール。

/// パラオ共和国 ///

ヒロ・スズキ 大統領補佐官。

パラオ共和国沿岸警備隊

はまおかりょうた
浜岡 亮太 沿岸警備艇のパトロール艇“ゲロン”号の船長。

マッカーサー・トージョー “ゲロン”号副長。

サブロー “ゲロン”号乗組員。

ヒデマロ “ゲロン”号乗組員。

トメキチ “ゲロン”号乗組員。

おおばみほ
大庭美穂 パラオでダイビング・ショップ“ドルフィン”を経営している優秀なインストラクター。

/// 中国 ///

国防省

海軍

ワンチエンシタ
王 建設 海軍大将。中央軍事委員会総政治部主任兼、戦略指揮局常務委員長。

シェイアイチュン
謝愛軍 海軍少将。作戦参謀。

陸軍

ウェイヤントン

韋 仰東 中將。

〔エキシビジョン&ニューボーン・グループ (ENG)〕

ユースランリイ

于 勝利 ENGのオーナー。中国の長者番付の常連。

〔ENG私設軍隊〕

モオクアンイン

莫 冠 英 少将。

チン ア ロン

金 亜龍 中佐。作戦参謀。

スンリイリイ

孫麗麗 少佐。八卦掌の有段者。

中国漁船団

チンリイシイ

秦 立 新 漁船“長魚7015”の船長。

フエン ア ビン

馮 亜平 “長魚7015”の甲板長。

イエホン

葉宏 “長魚7012”の甲板長。しかし、実は軍の工作員で海軍大尉。

上海商工会

フウホイ

付 輝 パラオ上海商工会の代表で、中国外交部の外交官。

チヤンフォンファイ

張 峰 輝 中国外交部の外交官。

ツォンチヤンウェイホン

宗 政 衛 紅 パラオコロール島にある「上海飯店」経営者。

●アメリカ

国防総省

バネッサ エージェントの支援を請け負っている黒人女性。

〔ハワイ・ヒューマン・リソース研究所 (HHR I)〕

チャールズ・キム HHR I代表。

ケン・マグヌス HHR I上級アナリスト。

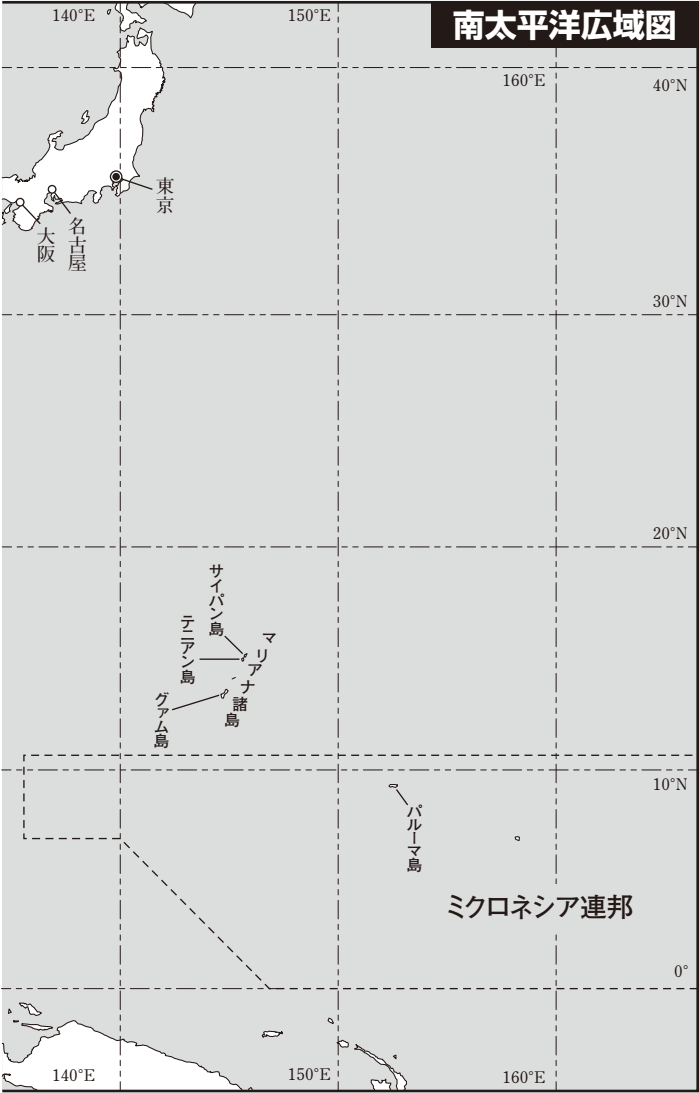
〔チャイナ・パシフィック・トラベル社〕

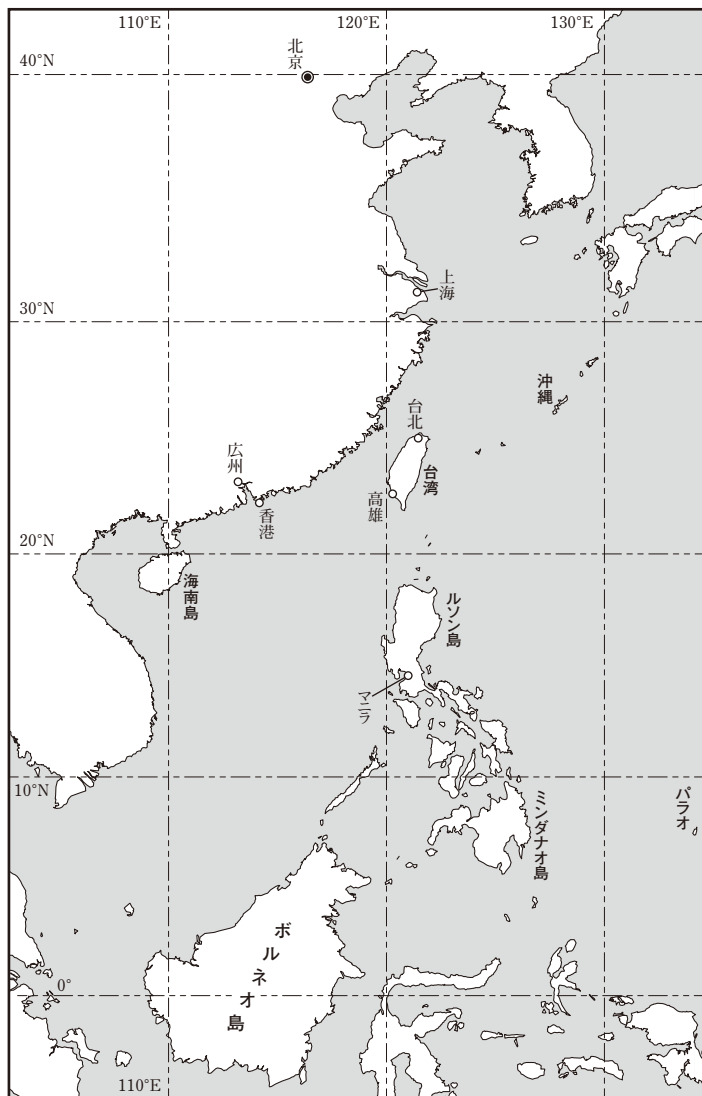
シイアフェイ

夏 妃 チャイナ・パシフィック・トラベル社のガイド兼通訳。
CIAにスカウトされ、現在〈サイレント・コア〉と行動をともにしている。

パラオ諸島地図







米中激突3

包囲下のパラオ

プロローグ

ビンロウジュの種に発がん性があることがわかったのは、最近のことだった。

この島に移住してからの最初の半年、はまおかりよう浜岡亮太は、親しくなる者たちへそれを説いて回ったが、無駄だった。

島を初めて訪れた時、男たちが口を真っ赤にして噛かんでいるものが何なのかわからなかった。

煙草たばこを吸わない浜岡は、噛み煙草の類だろうと察しをつけたが、試しに噛んでみた時の味は酷いものだった。それ以降口にしていない。

それから彼は「これを口にしつづけたら死ぬぞ」と忠告が続けたが、ある日、島民の葬儀に出

席たことをきっかけに、自分の警告が全くの無駄であることに気付いて止めた。

そもそもこの南洋の島の人々は、日本人のように長生きしない。長寿を望んでいるかどうかも怪しいと思ったからだ。

人は死ねば土に還る。

それがパラオ人の死生観だ。だから日本兵の遺骨収集にも良い顔はしない。ならば、海で死んだ人間はどうなのだろう？

そこでふと我に返った浜岡は、ライフベストのポケットからサイリウムを一本取り出し、ポキッと折ってからブリッジの床に投げた。

舵^{かじ}を握るといふか、舵にしがみつきながら、「大丈夫か!? 大丈夫か!?」と呼びかける。返事は無い。

「サブロー! トメキチの様子はどうか!?」

「血が!! 頭から血が止まりません——」

ブリッジの反対側から、乗組員で一番若い隊員が答えた。

「止血できるか!? 頭をタオルで巻け! 首を折るなよ。首を迂闊^{うかつ}に曲げないよう注意してタオルを巻け。きつく巻くんぞ」

漁船団からの銃撃を避けようと警備艇が舵を切った瞬間、足を滑らせて頭を打ったのだ。波も高く、この一〇〇トンの小型警備艇で、パトロールを継続するのは辛い状況だった。

パラオ共和国沿岸警備隊の警備艇「ゲロン」号は、今二〇隻を超える中国の漁船団に包囲され、翻弄^{はんろう}されていた。

この二時間の攻防で、六度、激突された。こちらからもぶつかっていったが、いかにせん一隻で出来ることは僅かだった。

ブリッジの窓が銃撃で割れ、猛烈な風が吹き込んでくる。波風で、ブリッジ内はたちまち水浸しになった。

元は、むらくも型巡視艇として日本の海を守っていたこの警備艇は、最高速度三〇ノットは出る。だが、外洋で活動するには明らかに小さすぎた。

艇首に装備されたM2ブローニング重機関銃の銃身が、だらしなく空を睨^{にら}んでいた。射撃手は、漁船からの攻撃を受けて数発弾を喰らい、甲板に伸びている。この五分間、びくりともしない。ライフベストは着用していたが、防弾ベストなんて着てなかった。そんな贅沢^{ぜいたく}なものは、はなから装備されていない。

幸い、腰に巻いたロープを銃座にカラビナで



留めていたせいで振り落とされずにすんでいたが、助けに行く暇がなかった。

「サブロー！ 手当が終わったら、トメキチの身体をカラビナで留めろ。シートの柱でも、ハッチのハンドルでもいい。あと、お前もヘルメットをかぶれ！」

ヘルメットを被り、ロープで自分の身体を確保した二人のクルーが、やっと舷側から前部甲板へと前進を始める。

浜岡は、波で船体がバウンドしないよう、暗視ゴーグルで前方を見遣りながら慎重に舵を操った。自腹で買った暗視ゴーグルのバッテリーも切れかけている。

ここを脱出するか否かを決断すべきタイミングだった。

「ヒデマロ、警備隊本部から返信はきたか？」

「いえ！ まだです——」

と後ろから返事があった。

「グアムの沿岸警備隊を呼び出して、重傷者がいる、救難ヘリの出動を要請すると連絡しろ！」

「電波状況がよくないんです。グアムなんて通じませんよ！」

この二年間、日本に衛星無線機の供与を要請し続けたが、無視された。それがこの結果だった。

「仕方ない。離脱する。脱出するぞ！」

「艇長、脱出するなら、弾を撃ち尽くしてからだぞ！ 仇を討つ」
かたき

機関室から、副長を兼ねるマッカーサー・トージョーが口を出した。

「マック、もう無理だ。ここで船体に孔でも開いたら、たちまち沈没だぞ。立ち止まった瞬間に蜂の巣にされる。逃げるのが第一だ」

「いや、艇の操縦はあんたの領分だが、部隊としての指揮権は俺にある。もう一隻だけ攻撃する。

弾を撃ち尽くし、撃沈してから引き揚げる」

「責任は取れないぞ！」

「もちろんだ。ここはパラオの海だ。自分たちで守る」

すでに一二時間を越えて、中国の漁船団との攻防が続いていた。とても漁船とは思えない連携を取り、こちらを排除しようと躍起になってくる。

最初は、いつもの、ありきたりな追跡劇からはじまった。警備艇の速度にものをいわせて、網を切り、放水で警告する程度に留めていたが、三隻分の網を切ったところで、さすがに相手もキレたのだろう。体当たりをくらわしてきた。

攻防は夜に入っても続き、M2での威嚇いかくを始め、漁船へと乗り移ろうとしたら、AKを出して反撃してきた。ブリッジ内で二人が負傷し、こちらの銃手は、たぶん死んだ。

マーシャル、ミクロネシア、パラオの三カ国が

保有している警備艇はほんの数隻で、メンテナンスも満足に出来ず、その稼働日数は、年間一ヶ月あるかないかという惨状さんじょうだった。

昔から日本、韓国の漁船が我が者顔に振る舞っていたが、中国の乱暴狼藉らんぼうろうぜきは、その比ではない。日本、オーストラリア、アメリカの三カ国で、これら太平洋島嶼とうしよ国の沿岸警備能力を向上させる計画が進んでいたが、実態はなかなかうまく進んではいなかった。

「一隻だぞ！ マック。あと一隻だけ攻撃して、ただちに脱出する」

浜岡は、上半身を乗り出して獲物を探した。こんな行動、どうかしていると思ったが、それがパラオ流だ。

第一章 グラム

陸上自衛隊特殊作戦群の特殊部隊サイレント・コアの二個小隊は、二機のMCH-101大型ヘリと、護衛艦隊が搭載する二機のSH-60K哨戒ヘリコプターに分乗し、ミクロネシアの海域からグラムまでひとつ飛びで北上した。

ヘリがそれぞれアンダーセン空軍基地に着陸する。

部隊は、そこでハンガーへと移動し、本国からの応援と関係者の出迎えを受けた。エプロンには、それらを運んできた航空自衛隊のC-130輸送機がまだ止まっていた。

ミクロネシア連邦の観光地パルーマ島に秘密基

地を作っていた中国軍と、数日間過酷な戦闘を繰り広げた司馬^{しばひかる}光三佐は、「あたし、しばらく寝させてもらいますから」と、さっさとタクシーを呼んで基地を出ていった。

司馬と一緒に戦った韓国陸軍空挺^{カンチエハ}の姜彩夏大尉も一緒に休みにいくかと誘われたが、本国からの命令を待つと断った。

「寝るって、どこですか？」と、もう一個小隊の指揮を執る土門^{どもんこうへい}康平三佐に姜は尋ねた。

「ああ、司馬さん？ あの人、ホテル街の外れにコンドミニアムを所有してるから。君も行っているよ。休息は必要だ」

「いえ、私、まだ若いですから」

何気なく言ったが、土門は「それ、司馬さんの前じゃ禁句だからね」と真顔で応じた。

「パルーマ島に残した私の荷物はどうなるんでしょうか？ 私物のノートパソコンとかあるんですか……」

「領事館が手配してくれるよ」

「私は、まだここに留まる必要があると思います？」

土門は、さあと首をかしげた。

「次の任務地だと想定されるパラオなら、韓国がそう関係するとも思えないけどね」

「今後とも韓国に付き合えと仰るのなら、せめて兵隊が欲しいですわ。私一人じゃ、ただの観戦武官です」

「まあ、パルーマ島での任務は、実質、諜報活動としてのスタートだったから、それは仕方ないね。

まさか大部隊相手にゲリラ戦を繰り広げる羽目になるとは思わなかったし」

二人のやりとりを横目に、部隊に同行した中国系アメリカ人の夏妃^{シイアフネイ}が手持ちぶさたにしていると、ハンガーの外にステーション・ワゴンが止まっているが見えた。運転していた黒人女性がシアを見つけて手招きする。

近づく「後ろに乗れ」と言う。ワゴンの運転席には、国防総省の高官が乗っていることを示すプライオリティ・ボードが、ダッシュボードの上に乗せられていた。

バックシートに乗り込むと、「ご苦労さま。もっとベテランかと思っていたわ」と女は言った。

「私の名前を覚える必要はないけれど、バネッサよ。今は、貴方がたファームのエージェントの支援を請け負っている」

「はあ……」

「いろいろ聞きたいことはあるでしょうが、私も何かの事情を報し報されているわけじゃありません。私に与えられた命令は一つ。貴方が望む支援を与え、休息を取らせろと」

「ありがたいです。ここしばらく、ともに寝てません。藪やぶの中を走り回り、慣れない銃をぶっ放し……。シャワーと、ベッドが欲しいわ。それに下着も替えたいし。それで、あの……あたし、また戦闘服とか着る必要があるんでしょうか？」

「私は知りません。服の類は、基地内のPXで揃うでしょう。ブラジャーからパンプスに至るまで。食事は？」

「それよりシャワーをお願いします」

「了解。将官専用のゲストハウスを確保したから、そこでゆっくり休んで。必要なものがあつたら、すべて従兵に依頼してください」

「パラオで何かあつたんですか？」

「ああ、それね……」

バネッサは、どこまで喋っていいか一瞬迷ったようにしてから口を開いた。

「中国の漁船団とパラオの沿岸警備隊が銃撃戦を繰り広げ、双方に死傷者が出ました。ニュースのヘッドラインとしてはそんなところね。詳しくは知りません」

「じゃあ、話としては、海軍同士で終わるわけですよね？」

「貴方は北京語ペキンの通訳だって出来るんでしょう？ 貴重な戦力だわ。とにかく、一休みしてちょうだい」

ワゴンが兵士とすれ違うたび、相手は立ち止まっていちいち畏かしこまった敬礼を返す。自分は別にVIPでも本物のスパイでもないのに、居心地が悪かった。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。